HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	＜代表＞の時代 ： 文学極盛極衰論争と＜啓蒙＞＜国民＞＜文学史＞
Author(s)	花輪, 浩史
Citation	国語国文研究, 134, 25-43
Issue Date	2008-03-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93362
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_134-25-43.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

〈代表〉の時代

――文学極盛極衰論争と〈啓蒙〉〈国民〉〈文学史〉――

花輪浩史

はじめに

明治二十三年、矢野龍渓『浮城物語』[1]をめぐって、のちに文学極盛極衰論争といわれる論争があった。この論争は従来、文学とは何かという概念をめぐる抽象的な論争とされ、政治と文学という繰り返される論争の原型という評価が与えられることもある。しかし、論争と同時代の言説を綿密に検討すると、文学内部の対立に留まらない幅広い問題を含んでいたことがわかる。極盛か極衰かというのは見かけ上の対立であり、〈啓蒙〉という共通した態度の内部における差異にすぎない。〈国民〉創設という時代の課題のなかで、誰を〈啓蒙〉し誰を〈啓蒙〉しないのか、という断絶と階層を設けることで、大衆をどのように〈国民〉化してゆくか、という問題と密接に関係しているのである。以下の議論では、〈国民〉化への二つの〈代表〉システムが示される一方、その二つのシステムが文学概念を模索する文学者たちの態度として、また、勃興期の新聞メディアの態度として、浮かび上がってくる。論争から〈文学史〉への議論を辿ることで、〈国民〉創設と文学の創設をともに規定する二つの〈代表〉システムが混在してせめぎあう「〈代表〉の時代」の様相が明らかになるだろう。主に問題にするのは、論争ではあいまいにされた硯友社系雑誌の性質、「読売新聞」の〈代表〉システム、そして、従来は論争と無関係とされる坪内逍遥の〈文学史〉への欲望である。

一　文学極盛極衰論争

論争というからには対立がなければならないが、論争の過程を丁寧に追ってゆくとまず気づくのは、だれも極盛の立場から発言していないことである。そして奇妙なことに、従来の研究で詳しくこの点に言及しているものは見当たらない。そもそも先行研究のほとんどは、矢野龍渓『浮城物語』の作品論の一部として、あるいは文学

史的な関心において論争に触れており、論争自体を周囲との関連で精細に研究したとは言い難い。[2] 本稿はこれらの不在（極盛の不在、研究の不在）を手がかりとして考察を始めようとするが、その前に、論争の経過をとりあえずまとめておきたい。

論争の発端は、内田不知庵による「島田三郎君に質す」と題した批評である。明治二十三年二月一日「国民新聞」（以下、「国民」）一面で開始され、二日間掲載された文章は、前年十二月の「女学雑誌」に二回に渡って掲載された「文学極衰」「文学極衰（其二）」（第一九一、一九二号。それぞれ島田三郎と福沢諭吉の演説の文書化とされる）に反論したものである。島田と福沢はともに、見かけ上、文学は興隆しているように見えるとしながら、売れるものを書いているだけで「雄厚絶大の象」がないこと（島田）、「一歩人に抜きんでんとするの精神」が減少していること（福沢）を批判していた。一月には北村透谷が、同誌上で「何故にか余は当代の文学に満足せざる、曰く唯時に逢ざるの文字多きを見ればなり、今は得意の月日には非ざるを彼等は得意と思ひて歓喜の筆を弄す、今は慷慨する者を要するの日なるに彼等は笑談すれども一滴の涙はあらず、片々積来るの文字は寧ろ時流に媚んとするに近からずや、しからざれば将自家の歓楽を表露するに止まるか」（「当世文学の潮模様」第一九四号、一月一日）とも述べており、当時、「女学雑誌」誌上を中心に現状の文学状況を危惧する発言が続いていた。

しかし、それがともかく論争の体を成すのは不知庵からである。例えば、山田美妙は不知庵以前に島田と福田に反論しているが（「いらつめ」第三九号、一月二十二日）、言葉尻を捉えた寸評にすぎない。不知庵の二日間にわたる執拗な反論によって、当時なんとなく共有されていた極衰観が照射され、対立構図が生み出された、といえる。不知庵は、出版技術の進歩による読者層の拡大、維新後と比較しての文学の進歩、などを挙げ「嗚呼新機運既に熟せり既に熟せり、大豪傑は正に来たらんとす現れんとす。此時に於て極衰と公言するは非凡の卓見」として、極衰観を提出する文脈に着目して反論した。ここで重要なのは、不知庵の反論はまた、極盛でもないことを明言しており、極衰を言い出すその文脈を批判していることである。つまり、現状は極盛でも極衰でもないのに、極衰だと定義することを批判しているのである。[3] 不知庵にとっては、極盛対極衰ではなく、極衰対反極衰なのだ。それが極盛対極衰とされるのは、否定するためだけに用いられた「極盛」という言葉にあるだろう。本稿の関心は、「極盛」と名指されたものの内実、および、それを否定する過程に含まれている問題である。

さて、その後、不知庵に反発するかのようにいくつもの極衰観が新聞・雑誌に現れるが、[4] 極盛側に立つものがないのはもちろん、不知庵と同じように文脈を批判する反極衰も皆無である。硯友社系の文学者が積極的に発言しないという理由が大きいが、島田や「女学雑誌」記者が直接不知庵に応えた形跡がないことからも、当時の極衰観の広がりが推測される。ここまでが極衰論争ともいわれている。

不知庵の批評に先立つ一月十六日から「郵便報知新聞」に連載されていた矢野龍渓「報知異聞」が四月、『浮城物語』と改題されて出版された。森田思軒、徳富蘇峰、森鷗外、中江兆民、犬養毅が寄せた序文は、それぞれ「国民之友」などに発表されていたものだった

が、蘇峰が「局面濶大、驚くべく、喜ぶべき冒険の事業、分湧して来る、其変転宛も走馬灯の如く、人をして奇を呼び、快を叫ばしむ」と、構想が大きく実学的であることが賛美する理由になっている。同時に「所謂実学を架空文字の中に寓したる者」と表現するように、必ず現在の文学情況への批判を含んでいる。それは、例えば、「米粒に千字文を彫りたるが如き」（蘇峰）「彼等は概ね彫刻に巧みにして未だ造家の述を知らざるに似たり」（犬養）といった批判である。

これらの序文と龍渓自身の自序に対して、石橋忍月の批評（「報知異聞（矢野龍渓氏著）」「国民之友」第七八号、四月三日）が現れて作品評価の対立構図が明らかになる。忍月は、趣向が先にあって人物がまったく描けていないことを問題にし、「烟小説」と切り捨てている。そして自らの文学観を「小説は美術的の文字たらざるべからず、…略…人間生活を写すを以って目的となさざるべからず、人と運命との間を規定する天然の法則を出さざるべからず、動力と反動力とより来れる行為を写さざるべからず」と述べる。続いて不知庵は五月八日、十六日、二十三日と「国民」に「「浮城物語」を読む」を掲載し、作品批判とともに、龍渓だけでなく蘇峰らの文学観をも問題にして、作品評価と文学論争を結びつけた。その批判は、主に「悦ばしむる」という龍渓の自序に向けられ、「小説は現代の人情を写すものにして、此以外に小説なしと云ふも可なり」「小説は小説なり、小説外に冠詞を附すべき特殊のものある理なし」「余は断じて曰う、「浮城物語」は文学上半銭を値するものにあらず」などとして娯楽としての小説を否定している。また、「蓋し小説は人生の真理を詩学的に示すものなれば、社会人情の変遷に依て又進化するは数の免れざる処にして、若し今日一般の社会人情を放擲して其境外に脱出したる小説を作らんとするも能はず」と、小説と「真理」や「社会」を結びつけている。

不知庵の批評を受けて、龍渓は「郵便報知」「国民」両紙上に講演を文章化した「浮城物語立案の始末」を掲載した（六月二十八日～七月二日。「郵便報知」は七月一日まで）。「読者に娯楽を与ふるは小説の生産物なり世を矯め俗を激し人を戒め時を諷するは是れその副産物なり」「小説の優劣を鑑定するのは世上の読者なり」という明確な読者意識から出発し、読者はいろんな娯楽を求めているとして、不知庵らが推し進めている「緻密文字」は範囲が狭いうえに、内容に読者がついていけていないと指摘する。そして、「我国の今日は一寸の談話にも漢語崩し新聞体の漢語調を用ゆるの時世なり故に漢語調を用ふるも左程異状には見へまじと考へたり」と、自らの文学観と文体観を明らかにする。龍渓の読者像によると、読者は壮大な物語を漢文崩しで求めていることになる。[5]

論争は不知庵が「国民」に「龍渓居士に質す」を発表して（七月十五日、十六日）、とりあえず終結する。[6]『浮城物語』をめぐるこのやりとりは浮城論争として「女学雑誌」誌上における極衰論争と切り離されることもあるが、すでに二月一日の島田への反論に「矢野龍渓氏にも君と同じく慨嘆する処ありて一小説を著はされたり」とあるように、当初から『浮城物語』の評価と論争はセットになっており、不知庵が作り出した一続きの論争という色合いが濃い。

以上のような経緯は、「女学雑誌」『浮城物語』対不知庵・忍月という対立構図、または新旧の文学観の交替として評価されている。

柳田泉は「不知庵は、『浮城物語』の批評を目的としているのではなく、『浮城物語』を生じた龍渓の精神、その小説観が、文壇文学の固守尊奉する純文学的原理を侵犯するに至るのを見て、その擁護のために起った」[7]と〝大衆文学対純文学〟という図式を読み取り、越智治雄は「確かにここで文学史の上では一つの時代が終わろうとしていた。それは龍渓の、また外山の時代、啓蒙家の時代であった。啓蒙家たちの志向した近代と文学的近代の断絶、これが『浮城物語』の提起する問題なのである」[8]と〝啓蒙文学対近代文学〟を読み取る。一方で、十川信介は「極衰論者が直接に非難したのは、「涙字、愛字、情字」を売り物にする硯友社系の人情小説だったはずだが、…略…反論の先頭に立ったのは、それまで硯友社の小説を批判しつづけて来た忍月と不知庵だった。…略…文学極衰論とは、「人情小説」というかたちのノベルに対して、「己れ先づ鬱勃言はんと欲する」作家主体の欠如と、「絶えて雄厚絶大の象な」き欠点を批判して、ロマンスの復権を試みる狼烟であり、最終的には逍遥が清算しなければならなぬ債務であった」[9]として〝ノベル対ロマンス〟の対立構図を見つつも、硯友社を視野に入れて批判と反論のずれの様相を浮かび上がらせており、この点は後に詳しく見ていきたい。文学概念の歴史的変遷を追う鈴木貞美は「矢野龍渓の主張は、あくまで広義の「文学」に立つ「国民文学論」だった。…略…そうであるがゆえに未熟な言語芸術観は根底から揺さぶられたのだ。坪内逍遥『小説神髄』に刺激を受けて明治二十年を前後する時期に出発を遂げた作家たちは、そして逍遥その人も、言語芸術という概念のいわば外部に立つ議論によって、その純粋写実主義的な言語芸術観の決定的な限界を思い知らされたのだ」[10]と、〝広義の文学対狭義の文学〟の対立構図として捉え、その乗り越えの過程として論争を評価している。

このように見てくると、論者によって対立の内容も異なれば、結末への評価（どちらが論争を制したのか）も異なっていることがわかる。しかしともかく、不知庵によって作り出された対立構図（極衰対反極衰）を前提とした研究になっていることは間違いない。しかし、これから詳しく見ていくように、むしろ対立のあいまいさこそが、この論争の問題点なのである。あいまいさを対立として図式的に整理することによって見失われていることを問い直すこと。それぞれ別の対立点を見出し続けてきたこれまでの研究のあり方ではなく、対立関係そのものの磁場ともいうべき問題系を導き出すこと。そのために、対立は、それが作られた過程から検証しなくてはならない。以下で行う論争の再定義は、論争の評価に「読者」を導入することによって、対立と見えるものが実は共通した土台をもっていることを示そうとするものである。その共通した土台としての〈啓蒙〉の奇妙な側面を確認しつつ、新たな線引きをすることで、論争の周囲へとつながる視点を獲得したい。

二　論争の再定義
――三つの〈啓蒙〉と〈代表〉システム

不知庵が論争を始めた場所に戻ろう。それは徳富蘇峰の民友社が発行する「国民」の創刊号第一面だった。その年七月の第一回衆議

員議員選挙に向けて、新聞雑誌の市場拡大が期待されるなか、蘇峰は雑誌「国民之友」に加えて平民主義をさらに推し進めるために新聞経営に乗り出し、そのために新進批評家の不知庵を新たに雇った。[11] それまでの「女学雑誌」誌上における論争などとは別の次元に不知庵は立ったというべきだろう。[12] それは不知庵の批評のわずか四日後には反論が掲載されるという、月一回またはせいぜい数回発行の雑誌では考えられない事態である。[13] そもそも蘇峰自身が『浮城物語』を評価しているように、民友社内で不知庵は思想的に孤立していたともいわれている。[14]

新聞批評へのデビューと、その新聞自体の論調との齟齬。そこからは、孤立する文学者・不知庵の姿が浮かび上がってくるようだが、しかし、本当に不知庵と民友社はそのような〝水と油〟の関係だったのだろうか。「国民」が掲げた〈独立〉や〈中立〉は、現存する多くの政党新聞を尻目に、選挙を前にして〈国民〉の創出を急ぎ、自らがその〈国民〉を〈代表〉する新聞たらんとするものだった。[15] 浅野正道は民友社と政教社の新聞雑誌を論じる中で「〈中立〉の視点をとるという権威に基づいて、彼らは、全てを〈代表〉しうる立場、あるいは、全てを見渡せる立場に立とうとする」と指摘する。〈国民〉は〈代表〉されるものとして創り出されるが、同時に、〈代表〉する側である知識人の連帯によって、実際には、その大部分である大衆は沈黙を強いられる。[16] 新たに〈国民〉として創出すべき大衆に声を与えるのではなくて、大衆を沈黙させたうえで一方的に〈代表〉して、いわば、内容のない空虚な〈国民〉を作り出す。そしてそのような〈国民〉創生過程を共有する知識人による読者共同体が要請される。異常ともいえる〈代表〉化である。ここには、〈代表〉する側である「われわれ」知識人と、〈代表〉される側である「彼ら」大衆の断絶が、無根拠かつ無意識に前提とされている。また、沈黙する大衆を媒介として、書き手と読者は知識人の共同体を創出するが、その共同体の内部においても、書き手から読者への〝啓蒙の階層〟が確認できる。つまり、図式的にいえば、知識人（書き手）→知識人（読者）／大衆という三層構造になっているのだ（最後の／は共同体からの排除）。

このように、読者と大衆の違いを考慮に入れる時、不知庵の文学観は、決して〝民友社的なもの〟と離れたところにあるわけではない。論争において、不知庵は龍渓の娯楽文学観を批判し、最後まで「君が小説の優劣を判定するは世間の読者にありと云ふに到つては君の為に最も惜しまざるを得ず」として、読者を限定する姿勢を持っている。そこには真理の小説を解さない大衆の排除、それを解する書き手と読者＝知識人の共同体創出、そのための書き手と批評家による読者＝知識人への〝啓蒙の階層〟がある。不知庵にとっての大衆は、〝民友社的なもの〟における大衆と同じように、存在するが見ない対象であり、この構図においては、大衆を沈黙させたうえで〈代表〉することによって、文学が共同体的に高められている。民友社と不知庵に共通するこの異常な代表化のシステムを、〈沈黙と代表〉システムと名づけておきたい。両者とも、〈沈黙と代表〉によって「全てを見渡せる立場」に立とうとするのであり、そこに共通している力学は、排除を伴う〈啓蒙〉である。このシステムにおいては〈啓蒙〉の射程が限られており、排除の領域、つまり代表化されない膨

大な領域が残っている。この排除の領域が支えることによって〈代表〉を可能にしているのである。

読者を考慮／選別することにおいて、極衰派と不知庵が〈沈黙と代表〉において、または〝啓蒙の階層〟において、同じ場所に立っていることが明らかになった。その意味では、論争と見えたものは、実は論争になっていないという面を持っているのである。主張がかみ合っていないという意味ではなく、むしろ同じ主張を別の言葉で表現しているにすぎないのである。もちろん、両者の間には差異があるが、これまで見過ごされてきたのは、両者が同じ側として、龍渓の読者論に対立している点である。そのような見通しを補強するために、次に、文学の現状認識、理想とする文学、持論を展開するときの語彙に注目して、論争に現れる〈啓蒙〉の型を三分類する。〈啓蒙〉という共通した土台の上での極衰派、不知庵、龍渓の間の差異こそ、論争の焦点を導き出す鍵になるように思われるからである。以下では、「壮士」「青年」「少年」という分類を用いるが、それらは具体的な人間像ではなく、あくまで論争の分布を見分けるための象徴的な言葉、〈啓蒙〉のモデルを分かりやすく分類した、いわば符号である。[17]

まず、現状を極衰と名づけ、政治文学を理想とし、「慷慨」「鬱勃」という語彙で持論を展開するグループが存在する。論争において、龍渓を除くすべての極衰派が含まれるこのグループを「壮士型啓蒙」と定義したい。島田、透谷、思軒、鷗外、蘇峰、兆民らは、その後のそれぞれの歩みとは別に、この論争においては同じように振舞っている。自由民権運動のなかで生まれた、国事を荷う責任感を持った「壮士」のようにである。「壮士」は、運動会、演説会などに集まり、詩を吟じ舞う身体表現と、漢文脈による形式的表現を好む集団であり、同質的で階層性が薄いことに特徴があった。国会開会を目前にした当時の彼らにとっては、新聞雑誌の読者をいかに啓蒙して〈政治的主体〉とするかが問題になっていた。メディアを通して啓蒙するのは、漢文脈による定型で悲憤慷慨する読者、いわば「壮士」予備軍である。ここでの読者はあらかじめ選別された読者＝知識人であり、その他の大衆は沈黙したままであることが要請されている。よく知られているように、蘇峰の平民主義の対象はすべての人々ではなく、地方の紳士として想定されていたことを思い起こせばよいだろう。

次に、現状は極衰でも極盛でもないとし、純粋文学を理想とし、「運命」「真理」という語彙で持論を展開するのが不知庵と忍月であり、両名を「青年型啓蒙」と定義する。「青年」は、「壮士」のように直接行動するのではなく、新聞雑誌を通じて内面を共有する集団のことを指している。内面は、一人で小説を黙読することを通して形成される。論争の時点での不知庵・忍月にとっては、新聞雑誌の読者をいかに啓蒙して〈内省的主体〉とするかが問題になっていた。啓蒙するのは、緻密な文体により沈思黙考する孤独な読者、いわば「青年」予備軍である。ここでも、読者はすでに選別されており、内省できない大衆は沈黙を余儀なくされる。例えば、二葉亭四迷『浮雲』の言文一致体に、まるで自分のことが書いてあるようだと共感するのが彼らであり、共感できない人々は相手にされないのだ。[18]彼

らは孤独のうちに共同体となる。

三つ目に、現状はとりあえず極衰としつつ、国民文学を理想とし、「娯楽」という語彙で持論を展開する龍渓を「少年型啓蒙」とする。「壮士」型、「青年」型の〈沈黙と代表〉システムにおいて、大衆は〈代表〉されるものとして沈黙を要請されていたが、「少年」型では、沈黙が要請されない点が重要である。「少年」は沈黙ではなく、いわば、可視化される。論争時点の龍渓にとっては、新聞雑誌を読み始めた大衆をいかにして読者へと囲い込むかが問題だった。その意味で、龍渓は大衆そのものを見ようとし、近づこうとし、啓蒙しようとする。しかし、可視化される「少年」は、あらかじめ〈政治的主体〉にも〈内省的主体〉にもなりえないものとして規定されている。行動または内省する主体としてではなく、教育され導かれる、いわば〈誘惑される主体〉として啓蒙されるのである。

我国の読者は恰も空腹饑腸の時に在る者なり、此際に於て手近く勝を得るの道は地盆の牡丹餅を提出するに利ありとす、若し他日小説の出ること月に年に多きを加へ読者の口腹既に百味に飽く時に至らば其節こそ一片の煉羊羹を好むの時代とならん、我が小説界は恰も亜弗利加の大野に似たり[19]

「空腹」状態の日本の読者に上等の「煉羊羹」はまだ早いので「牡丹餅」で十分という龍渓の配慮に注目したい。これは前記二つの啓蒙の型にはみられない大衆全般への奇妙な配慮である。文学は読者のものである。しかし、「我国の読者」にはまだ早い。楽しませて、読者に仕立て上げなくてはならない。ここでは、書き手と大衆の共同体が成立することはない。「少年」は、自ら楽しみつつ動員される対象でしかない。教育制度の整備によって今後ますます増加する、新聞の漢文崩し体が読める程度の大衆一般が、いわば「少年」予備軍である。大衆は可視化され、配慮されるが、決して〈代表〉する側には入れず、文学の誘惑に抗えない存在となるべく規定されているのである。大衆と読者、大衆と国民の関係が大きく変わっていることが分かるだろう。龍渓は小説を通じて、読者としての大衆、国民としての大衆を生み出そうとしているのだ。

そもそも、龍渓の「少年型啓蒙」は、代表する／されるという〈代表〉システムとは別の原理を含んでいる面がある。書き手から読者＝知識人へという〝啓蒙の階層〟は、〈啓蒙〉の射程の広がりとともに、〈代表〉システムを超えて、直接、書き手から大衆へ向けた啓蒙へと移っている。中間にあった知識人共同体がなくなり、大衆は〈代表〉システムを介在しない、またはシステムを通り抜けた直接的な対象になっている。個別に、しかし均質的に、誘惑・動員される大衆。〈誘惑〉の文学ともいえる龍渓の娯楽論にあるのは、〈代表〉する側とされる側の断絶ではないのである。しかし、書き手に直接〈誘惑〉され、啓蒙される大衆は、書き手の思い通りに〈誘惑〉され、啓蒙されるものとされており、そこには超えられない制約が課されてもいる。[20]

この三分類がいずれも〈啓蒙〉であることは確認しておきたい。沈黙を伴う「壮士」「青年」としての〈啓蒙〉と、可視化を伴う「少年」としての〈啓蒙〉。ここで確認が必要なのは、〈啓蒙〉を欠いた硯友社系の文学が論争において想定され、指摘されてさえいるにも

関わらず、対立構図を作り出した不知庵（そしてその後の主な研究）によって否認されることである。硯友社は批評の対象以前であり、無条件に排除されているようだ。つまり、現実には存在する〝〈啓蒙〉の文学対硯友社系文学〟という対立面が、極衰対反極衰という作られた対立によって、隠蔽されているのである。

「壮士」「青年」「少年」の三分類や沈黙対可視化の対立を合わせて考えると、従来の研究で指摘されているあらゆる対立構図は、①極衰対反極衰の対立を作り出した不知庵の構図に乗っている②〈啓蒙〉という共通要素を見ていない③硯友社や大衆を排除している④読者像を考慮していない、などの問題点が浮かび上がるだろう。以下では、以上のような盲点を明らかにしつつ当時の硯友社系文学や「読売新聞」の実情を探ることで、不知庵の構図が生まれる条件をさらに詳細に見ていきたい。

三　論争の周囲——二つの〈代表〉システム

論争において、〈啓蒙〉の三分類のいずれからも否定的に表象され排除されているように見える硯友社は、当時、雑誌「文庫」（明治二十二年三月～十一月）「小文学」（同年十一月～二十三年四月）「江戸むらさき」（同年六月～十二月）を発行していた。「文庫」では、不知庵・忍月ともに、批評の割には創作がよくないという趣旨で批判されている。注目すべきなのは、批評という行為自体が対象にされていることである。当てこすりと悪ふざけの文体の使用がそれを証明している。「批評のみかかくまで述作されるとは、恐ロ感スンの至」（漁山人「都の花所載藤庵主人著　当世文学通の悪口」第二五号、八月十二日）「以来はチト院本をはなれて、小説を書かれたしァ、書かれたいではあるぞいなァ」（外史氏「さとの月妄評」第二七号、十月十八日）。近代的な批評の成立について野口武彦は「近代批評言語は、いきなり暴力的に作り出された。江戸時代にできあがっていた「評判」のスタイルからの平和移行が不可能だったからである」と述べているが[21]、当時の批評がその「暴力」の過程にあったとするならば、「文庫」では、江戸以来の評判記が批評の「暴力」に対抗しているようである。しかし、不知庵・忍月の「暴力」はこの対抗する力をねじ伏せるほどに「暴力」的なのかというとそうでもない。継続誌である「小文学」には彼らの批評が連載されているのだ[22]。読者を純粋文学へと引き上げようとする不知庵・忍月は、そのために否定するはずの〝硯友社的なもの〟によってあらかじめ相対化されたうえで、その土壌に乗って批評を展開しているのである。不知庵らの〈沈黙と代表〉や〝啓蒙の階層〟は、〝硯友社的なもの〟の内部で、その圧倒的な影響下にあって、周囲と差別化するための戦いでもあったのだ。

〝硯友社的なもの〟は、〈啓蒙〉を避け、文学を分類・差異化する。「江戸むらさき」は「小説の種類」（第二号、明治二十三年七月五日）で、「金箔小説」「反吐小説」「五月雨小説」「三日月小説」の四種類を挙げているが、例えば「金箔小説」は「一句にて言盡すべきことを一行、一行にて済むべきことを十行、十行を一回、一回を二回とたたきのばすゆえ金箔といふ。此名を見ても、吹ば飛ぶような貫目なき小説たることを知るべし」という調子である。「金箔」「反吐」

「五月雨」「三日月」という言葉の間にはいかなる意味での連関も上位の全体も想定されておらず、どこまでも異なる小説ジャンルがあるばかりだ。このような態度は、もちろん歴史的に珍しいわけではないが、不知庵・忍月らの批評が一方に存在しながら、なおかつ形式的に分類し、分類すること自体を楽しむような態度、つまり、〝啓蒙の階層〟とは無縁の、娯楽を重視する態度が、同時代的に同じ場所で繰り広げられていることを確認しておきたい。[23] 一方は、沈黙させて〝啓蒙の階層〟をつくろうとし、他方は饒舌に分類して階層を無化しようとする。硯友社系雑誌こそ、〈沈黙と代表〉をめぐる抗争の場だったのである。

ところで、硯友社的、評判記的な分類態度は次々に差異を生み出し、作者一人一人の差異、読者一人一人の差異にまで及んでいく。このような差異化は、個別の読者の文学観を紙面に可視化することに行き着き、読者が持つ雑多な作家イメージ、作品イメージは、可視化されることで表象空間の安定を脅かすことにもなるだろう。次にこの可視化の現象を「読売新聞」で具体的に確認したい。

「読売」は初めて小説欄を独立して扱った新聞で、明治二十二年末には、坪内逍遥、尾崎紅葉、幸田露伴を入社させている。同紙は文芸主筆・逍遥の下で文学新聞の道を進み、やがては硯友社の牙城のようになるのであり、系譜的にも硯友社に近い。明治二十三年一月二十九日、三十二人の作家を花に例えた読者からの投書「当世作者花競」掲載に際して、同紙記者は但し書きをつけた。

記者申したく右は投書のままに一字も改めず掲載致せしものなれば諸先生中定めて洩れたるも多からんと存じ候まま（現に本社の梅花道人の如き大不平を鳴し居り候）来月三日を締切と致し一寸あッさりご投票下され度此段文学通の諸君にご依頼申上候

投書自体は、「愛花女史」という読者が「梅…春の舎」「桃…南翠」などと作家を好きなように意味づけたものであり、すでに指摘したような硯友社的な娯楽的態度といっていいものだ。この投書に対して、「梅花道人」というプロの作家の過敏な反応が示されている。読者が抱くある意味では勝手な作家イメージがメディア上に可視化され、それを真剣に受け取る作家がいる一方で、メディアはさらに読者を巻き込もうと投票を呼びかける。重要なのは、投票結果の提示の仕方である。結果をまとめた二月八日の「小説家花競」（作家は四十六人に増えている）には以下の但し書きがついている。

御投票あまり沢山にて何れを其れとも分ち兼ねる諸先生方少からねば、比べられし花の数最も多き点を取りて左に掲げ申候
但し不順序

前半部分には、可視化された個別イメージの集積に対処しきれない新聞メディアの限界があからさまに示されており、〝硯友社的なもの〟の力が明示されているようにみえる。投票によって可視化したがゆえに、読者による個別的かつ大量のイメージを無視することができなくなっているのである。「あッさり」依頼した投票は、記者の思惑を裏切って、読者のある意味で過剰な反応を呼び起こしたことがうかがえる。「何れを其れとも分かち兼ねる諸先生方」とは、記者の目からは作家と確定できない名前が多数存在したことの証だろ

う。〈沈黙と代表〉システムは機能せず、もはや〈中立〉の立場に立つことができないのだ。しかし、重点は後半にある。「最も多き点を取りて」とは多数決のことであり、新聞は読者に声を挙げさせたうえで、多数決を導入して〈代表〉を作り出す。換言すると、作者を花に例えるという個別的かつ大量のイメージは、多数決によって〈代表〉へと変換、吸収されているのだ。「読売」は、〝啓蒙の階層〟を放棄して判断を読者に委ねる形を取りながら、やはり最終的には〈代表〉することによって、「全てを見渡せる立場」に立とうとする。〝硯友社的なもの〟の力は、新聞メディアによって吸収され、可視化されたまま〈代表〉されてしまうというべきだろう。[24]

この〈可視化と代表〉に投票と多数決が不可欠であることは重視すべきである。大衆に声を挙げさせ、その内容には拘束されないまま、自らの正当性の拠り所とするのは、初めて議会を開催する当時の為政者たちの思惑とまったく同じであり、その際、選挙権が与えられるとともに制限された権利であったことは、正確に、読者に声を与えるとともにそれを枠付けるメディアの投票様式に反映している。[25] 上述の「読売」の投票は投書を元にしているが、当時、文学概念自体が論争の対象になっていることからして、この投書が文学者を限定する枠として機能していることは疑いえない。[26] そもそも、作家を花に例えるというかなり偏った枠はともかく、選から漏れたことで文学者の枠から外れたように感じたからこそ、「梅花道人」は「大不平を鳴し」たのである。また、投票結果が「不順序」に掲載されたことは、一方では、〈代表〉への変換・吸収の過程を見せないことによるメディアと〈代表〉する知識人の連帯でもあろうし、他方では、やはり、大衆の声に結果としての枠を設定することにもなるだろう。結果のあいまいな提示は、投票そのもののあいまいな性格を示している。例えば、獲得票順に記載したなら起きたかもしれない新たな「梅花道人」の「大不平」の種は、あいまいさによって未然に防がれているのではないか。

「読売」の記事は一見、それ自体が硯友社的、評判記的な悪ふざけに見える。〈代表〉とはいっても、依然として作家たちは意味連関のない花に例えられたままである。しかし、これは選挙の時代のまったく新しい事態と捉えるべきであろう。「読売」の記事をある程度真剣に受け止める読者がいるからこそ投票が成り立つのであり、また、「悪ふざけ」か真面目かに関係なく、そこに〈代表〉システムがある以上、個別の差異を消去する新しい権力装置が発生しているのである。つまり、硯友社系雑誌が〈沈黙と代表〉の抗争の場だったように、ここで「読売」は〈可視化と代表〉の抗争の場なのである。

〈可視化と代表〉は大衆を沈黙させずに声を挙げさせるが、それは決して自由な声ではなく枠を持っており、もう一つの、声を持った〈代表〉システムである。〈沈黙と代表〉は〈代表〉される側を沈黙させること（排除）で成り立ち、〈可視化と代表〉は〈代表〉される側を可視化すること（包含）で成り立つ。つまり、論争の内と外を通じて、「国民」的な〈沈黙と代表〉と「読売」的な〈可視化と代表〉という二つの〈代表〉システムが並存しているのである。まず、〈国民〉化の領域において、大衆を沈黙させることで〈国民〉化する力と、大衆を可視化することで〈国民〉化する力とがある。次に、文

学の領域において、〝硯友社的なもの〟を沈黙させ排除することで文学概念を構築しようとする力と、可視化して取り込むことで概念構築しようとする力とがあることになるのではないか。

並存する二つのシステムは、共犯的に作用しながらも抗争してせめぎあう、錯綜的な関係にある。あくまで〈沈黙と代表〉にとどまる不知庵・忍月は、一方で、大衆を排除しているが、他方では、差異化した個別的な声がたやすく〈代表〉されてしまう来るべき選挙の時代にあって、〈可視化と代表〉への抵抗でもあると評価できるのではないか。不知庵・忍月が「読売」的な〈可視化と代表〉に取り込まれまいとする〝メディアへの抵抗〟という意味と、沈黙という形で〈代表〉されている大衆が、〈可視化と代表〉という別のシステムを逃れる可能性、いわば〝沈黙の抵抗〟という意味と、二重の意味で、抵抗なのではないか。[27]誰かを黙らせる力と、特定の内容をしゃべらせる力という権力のあり方の違いを考えると、可視化して枠付きの声を与えることは、沈黙させるよりも、あくまで相対的にだが、より隠微な、それでいてより徹底的な力の行使の側面があるからである。[28]

そうだとしても、さらに問題になるのは、不知庵・忍月の拭い難い全体への志向である。以下では、不知庵が文学を統一した全体として把握すること、そして不知庵が〈文学史〉を構想することの意味を、坪内逍遥と比較しながら考察したい。異なる道筋で〈文学史〉を構想する二人の様子から、二つの〈代表〉システムの錯綜的な関係が、より明確になるだろう。

四　論争から〈文学史〉へ——逍遥と不知庵

「読売」が〝硯友社的なもの〟を取り込んで、メディアとして「全てを見渡す立場」に立とうとしたとき、文芸主筆の逍遥は、すでに『小説神髄』という批評のメディアを作り出していた。[29]ここでは、しかし、日本近代において批評を可能にしたメディアとしての『小説神髄』と不知庵との影響関係ではなく、同時期の逍遥と不知庵との関係を考えたい。従来、論争に関わっていないとされる逍遥だが、論争を準備し、その終結を図っているように思われるからである。そうした逍遥と比較することで、〈文学史〉構想へと向かう不知庵の欲望の所在やその意味が浮かび上がるのではないか。

逍遥は、不知庵が論争を作り出した二月一日のひと月前から、「読売」に文学の現状についての論評を集中的に掲載している。[30]同紙上の逍遥の文学論はその後影を潜め、論争に一応の区切りがついた七月十六日の二週間後に再び集中する。[31]掲載時期については様々な要因が考えられようが、ここで問題にしたいのは、論争以前、以後ときれいに二分される逍遥の文学論と論争との関連である。

論争以前、逍遥も現状を「不満足」と規定する。冊子から雑誌連載へ、長編から短編へという傾向は彼にとっては歓迎できるものではなかった。そして、不知庵・忍月の先駆者らしく、逍遥も小説を全体として純粋に高めようとする。「所詮今の文学は一個人の文学にして日本を代表すべき眞の文学とは思われぬなり」（一月一日）「当年の小説は「局部小説」なり即ち或社会の人物、或社会の事件或

一種の情操等を描くに力らを尽して全局（即ち人間の運命）に留意せるもの殆ど無かりき」（一月一五日）。これは不知庵・忍月の「青年型啓蒙」、〈沈黙と代表〉と変わりない〈代表〉の一例であるようにも見える。しかし逍遥は、不知庵・忍月が排除する龍渓的な可視化をも受け入れる。そのために、逆説的だが、逍遥は全体から新聞小説だけを特化するのである。

或意味にて言へば冊子は割合に有限なる読者を有し新聞紙は割合に無限なる読者を有す、第一冊子は値も高く又品によりては専門家にあらざれば買はぬものもあり、新聞紙は然らず些も雅心なき者もフト買とりて読むことあるべし…略…此筋の議論は夙に報知新聞にて論ぜしことあり又女学雑誌にても論ぜしことあり、只彼と此と異なる点は彼は此論を小説全体の上にいひ吾等は新聞紙の小説にのみいふ[32]

小説と新聞小説を区別する逍遥の立場は、小説が冊子から連載へと比重を移してゆく現状を追認するものである。同時に、それは龍渓の読者論の先取りにも見えるが、新聞小説を小説全体であるかのように語る龍渓と異なり、この時点の逍遥にとって新聞小説はあくまで例外なのである。[33]例外として新聞小説を区別、排除することで全体を保とうとした、と言い換えることもできる。逍遥は自ら、小説全体と新聞小説を媒介するメディアの位置に立って「全体を見渡し」、小説全体は依然として純粋小説として保持されている。

小説全体を純粋として高めようとしていた逍遥は、論争終結後の八月、上半期のまとめとして暗に論争に判定を下している。「文衰えたり」と見えるのは「物書かぬ作者の多くなりたる」ためであるが「なべての作者も怠がち」なわけではない。[34]「文学極衰」とまではいえないのである。このような判定に至る過程として、「文学界の反動」における論理に注目したい。ここで逍遥は「元禄文学と国文学と主大小説主義」を「反動」と定義する。

人事は本動と反動と正変と奇変との間に進歩する者也、本動も理勢の使者なれば反動もまた理勢の使者也、只互ひに相識らず又みづからをも知らざるゆえに我先づ情にくらみ随ッて他をも情の子とし、我先づ我見を張る、故に他も又我見を張る、我先づ誇る、ゆえに他もまた高言す、而して正教邪宗、斯道異端、死学活文、陳腐斬新等の名目此間に生れ相憎みてかみ搏ち互ひに理勢の愛子たるを忘れ互ひに和諧すべき骨肉たるを忘る[35]

「本動」と「反動」がそれと知らずに交替しつつ「進歩」することを、逍遥は「理勢」と説明する。この時点で、逍遥の文学には「本動」「反動」として差異が導入され、「本動」である純粋文学が、それ以外の文学ジャンルを飲み込んでいくという弁証法的な発展を想定しているのである。「本道も元は反動にして其智の子たるは一ツ也必要の嫡孫なり」[36]。自らが「本道」であることは自明であり、「容れよ容れよ、悉く容れて」と、全てを飲み込む「本道」の高みから、逍遥は論争の中止を勧告する。

論争以前から論争以後へ、逍遥は、全体＝純粋文学の立場から、複数に差異化している文学ジャンルを認める立場へ、その上で自らの純粋文学を全体に高める方向へ、と論旨を移動させている。論理に時間が含まれるようになり、その時間は未来へと続いていく一種

の〈文学史〉である。全体＝純粋文学は未来へ先延ばしされているのだ。「悉く容れよ」に示されるように、まず例外として新聞小説を「容れ」、次に「反動」としてすべてを「容れ」る。何も拒まない逍遥は、その果てに全体＝純粋文学を、ありうべき「全てを見渡せる立場」に立つ自身の姿を幻視しているのではあるまいか。もちろん、ここで、逍遥はまったく通底性のない差異化した複数の文学ジャンルから全体を求めているわけではないことにも注意が必要だろう。三日にわたる記事を逍遥は「君等は同胞也骨肉也」でしめくくる。「元禄文学と国文学と主大小説主義」を可視化して取り込んでゆくのは、それらがいずれも「同胞」「骨肉」だからである。ここには全体とナショナリティの根深い問題があるが、とにかく、逍遥が全体＝純粋文学を先延ばしして、その時間差の内に差異化した文学ジャンルを取り込んでいこうとしていること、つまり、全体へといたる猶予期間を担保していること、しかしその中にも自ずと制限が設定されていること、が確認される。

不知庵との違いをここに見ることができる。不知庵が「現代文学」で〈文学史〉へと関心をのばしたとき、複数の文学ジャンルを認める方向ではなく、全体＝純粋文学以外の文学をひたすら否認し続けるからだ。不知庵は、逍遥と違って自らメディアになろうとしない。「本道」と「反動」の運動の果ての全体＝純粋文学を求める逍遥が、歴史的な眼差しを未来へ向けるのとは異なり、不知庵は、全体＝純粋文学を、現在の固有性において全体であるべく定義しなければならない。不知庵が持ち出す「真理」は、〝固有かつ全体〟であるような普遍的なものである限り、その目的に奉仕するだろう。この「真理」を保持するために、不知庵は文学に具体的に何を求めていたのだろうか。

不知庵が全体＝純粋文学以外を否認するという時、彼自身が硯友社的な「当てこすりと悪ふざけ」の文体から出発して人気を博していたことに注意してもいいかもしれない[37]。明治二十二年夏から秋にかけて、ドストエフスキー『罪と罰』を読んだこと、また二葉亭四迷と知り会ったことが、不知庵の文学観を純粋文学へと変えたといわれている[38]。不知庵は自らの過去を否認するかのように、全体＝純粋文学にこだわっているのであり、そこから逍遥とは異なる〈文学史〉への欲望が生まれていると考えることもできる。

明治期に書かれた近代文学史（明治以降を対象とした文学史）としてかなり早い部類に入る「現代文学」[39]を特徴づけているのは、社会と文学の関係を捉えようとする視線である。論争を受けて、現状を「黄金時代」とも「三文文学」ともいえないとする不知庵は、基準を求めて過去へ向かう。向かった先は維新後または西南戦争後である。なぜならそれが、戦争の「余燼」を抑えるために文学が奨励された時代であり、奨励された結果、内容的に極衰が問題とされるまでになったからだ。

然れども当時の文筆家一般を見れば如何。彼等は唯風流に昏睡して常識を賤み世習を遠け俗陋卑拙の文字を濫用して徒らに世を漫罵するをもて相誇り以て自ら高しとして人類共和の本性を知らざるなり…略…柳北氏此間に在つて縦令浅かりしにもせよ少くも朝野新聞に雑録一欄を費して社会に対する冷罵を吐き

しは以て氏が一時に超絶せし所以を知るに足らむ[40]

戦後文学的状況の中で、不知庵が取り上げるのは「花月新誌」の成島柳北と「團々珍聞」だが、内容よりも社会的な文脈を評価していることが重要だろう。「俗陋卑拙の文字を濫用して徒らに世を漫罵する」一般的な文章世界を「超絶」していることが、評価の基準となる。不知庵の全体＝純粋文学の「真理」は、常に変わらぬ絶対的な普遍性ではなく、特定の社会に規定された相対的な「超絶」によって保たれている。それは作者の社会的な身振りでもありうるし、作品表現の社会への眼差しでもありうる。全体＝純粋文学の根拠としての「超絶」は、「青年型啓蒙」で確認したように、孤独という形ですでに社会に「超絶」している不知庵ら「青年」にとって、無条件に自らの文学的根拠となる。不知庵の〈文学史〉への欲望は、自らの文学の根拠を自らの社会的な位置取りに求めるきわめて形式的な振る舞いなのである。

不知庵にとっては自身が支持する全体＝純粋文学だけが表現としても身振りとしても「超絶」している唯一の文学であり、他にあるのは「文字を乱用」した文学に似たもの、文学者に似た人にすぎない。逍遥と比較すれば、逍遥の全体＝純粋文学は複数の個（複数の文学ジャンル、複数の文学者）を見つけ出し、取り込んだ果てにあるが、不知庵の全体＝純粋文学は最初から個であり、ジャンルはありえない。もちろん、この限定された個は今後、〝啓蒙の階層〟の対象となる「青年」によって、孤独の共同体として拡大してゆくことが期待されている。そのために、不知庵の啓蒙的な批評活動は存在するだろう。そして、その個には大衆の沈黙が寄り添っている。あらかじめ彼らの沈黙を〈代表〉しているからこそ、孤独な不知庵の「超絶」は保証されているのであり、全体＝純粋文学以外をあえて可視化する必要はないのである。一方、逍遥が可視化して取り込むのは、あらかじめ「反動」と認定された、「同胞」という枠におさまる「元禄文学と国文学と主大小説主義」だけであり、あらゆる文学ジャンルを可視化するわけではない。ここでも枠が機能している。〈沈黙と代表〉と〈可視化と代表〉は、〈文学史〉への欲望においてもそのまま機能しているのである。

おわりに

逍遥にしろ不知庵にしろ、ここにあるのは全体と個の関係であって、大衆文学対純文学、啓蒙文学対近代文学、ノベル対ロマンス、など様々な二項対立のバリエーションではない。対立構図を見つけ出して交替とみる〈文学史〉的な見取り図自体が、逍遥や不知庵が全体と個の関係を歴史的に捉え直す身振りの後に、その副産物として成立しているといえるだろう。そして、対立構図によって隠されてしまうのは、〝硯友社的なもの〟だけではなく、二つの〈代表〉システムの違いであり、おのおのの〈代表〉システムを通じて全体を求めてしまう〈文学史〉への欲望であるといえるのではないか。

様々なメディアで様々な人物が発言しているこの論争を、不知庵によって作り出され、不知庵によって終止符が打たれた論争として捉えるという限定をあえて行った。それは二人の応酬という形をとった同時代の著名な論争（舞姫論争や没理想論争）と違って、ど

のような意味で論争なのかという点を問題にしたかったからだ。しかし、のちに魯庵と名乗り、翻訳やいわゆる社会文学で身を立ててゆく文学者個人の全体像の中で当時の意味を確認したかったわけではない。あくまで特定の論争という時代的な限定の中で、何が起きているのかを確認したかったのである。

憲法発布から選挙、教育勅語、議会開催と続く政治的な〈代表〉が模索された時代には、文学の領域においても〈代表〉が模索されていた。そこに一つではなく二つの〈代表〉システムが働いていることを具体的に確認してきたことで、〈代表〉によって描き出される〈国民〉や〈文学史〉が、不変的に固有のものでも統一したものでもないことが明らかになったのではないか。〈国民〉や〈文学史〉は、必然的に、沈黙の領域や可視化の及ばぬ領域、つまり、〈国民〉ならざる領域や〈文学史〉ならざる領域を抱え込んでいるのである。そこから排除されたり、枠外に規定されたりする大衆や文学者や文学作品が必ず存在する。二つのシステムでは、当初から〈国民〉や〈文学史〉という全体は断念されているのだ。〈国民〉という全体は存在せず、また、〈国民〉全体に及ぶべき文学も存在しない。〈代表〉の時代とは、〈国民〉文学が存在しない時代なのである。

しかし、そのような全体の断念は、全体への欲望の条件でもある。文学も〈国民〉も全体のない場所で、差別化の抗争を通じて、全体を求めてゆくのであり、それゆえなおさら、権力装置としての〈代表〉を具体的に捉える必要があるのである。〈代表〉の時代とは、また、〈国民〉文学への欲望が芽生える時代なのである。全体のない、いってみれば、それぞれ断片化された要素しかないところで、全体を求めること。その抗争の場が、研友社系雑誌や「読売」だった。

不知庵のようにもう孤独のうちに沈黙して否認する必要はなくなり、逍遥のようにもう可視化して取り込む必要がなくなるような、全体＝〈国民〉文学はまだ来ていない。にもかかわらず、あるいはそれゆえに、戦前・戦後に繰り返される国民文学論（争）に顕著なように、いったんその権力装置が作動してしまえば、その時を目指して、全体を求めて、沈黙させる力と可視化する力が張り巡らされていくのであり、いずれかの力が大衆を捉え、〈代表〉し、〈国民〉化してゆくだろう。また、いずれかの力が複数の文学作品を捉え、〈代表〉し、〈文学史〉を構築してゆくだろう。明治二十年代という〈代表〉の時代だけが問題なのではないのである。

とはいえ、不知庵・忍月の〈沈黙と代表〉を〈可視化と代表〉へのある種の抵抗とみなしたように、〈代表〉システムが一つでないことは、構築される様々な代表（国家、国民、文学）が、その構築過程そのものによって抗争してしまう事態をも示している。近代国民国家成立以前、近代文学成立以前の明治二十年代に焦点をあてた本稿の意味は、一枚岩ではない国民概念、あるいは一筋縄ではいかない国民国家批判の契機を、〈代表〉化批判という方向で複線化する視点から見出したことにある。

付記

本稿は二〇〇七年三月十七日、近代文学会北海道支部例会での発表（「文学極盛極衰論争とその周囲―〈啓蒙〉〈代表〉〈文学史〉」）を元に、書き改めたものである。引用については、適宜、漢字表記を

新字体に改め、句読点を追加した。

1　「郵便報知新聞」明治二十三年一月十六日～三月十九日に『報知異聞』として連載。四月に単行本化で改題。

2　作品論の一部として、または文学史研究の対象として論争を研究した主なものとして、①柳田泉「矢野龍渓の『浮城物語』について」（『政治小説研究(下)』春秋社、一九六七）、②越智治雄「『浮城物語』とその周囲」（『近代文学の検討』白帝社、一九六二）、③平岡敏夫「『明治文学史』研究序説」（「文学」一九六四・二）、④野村喬「近代文学認識上の留意点（上）」（「文学」一九六四・八）、⑤十川信介「文学極衰論前後」（「文学」一九七六・六）、⑥鈴木貞美『日本の「文学」概念』（作品社、一九九八）などがあり、いずれも参考にした。なかでも十川氏の論究は、論争の問題点を広範に取り出しており、触発されるところが多かったが、やはり文学史を前提としている点で本稿と関心を異にする。

3　論争を通じて不知庵は終始この態度を貫いており、それは、論争の戦術という面ばかりではなく、硯友社系文学を念頭に置いた場合、不知庵自身が事実としての文学極衰に共感する部分をもっていたからではないかと思われる。極衰派と不知庵の共犯的な関係については後述。

4　「文学世界の近況」（「朝野新聞」二月二十七日）、無黄道士「小説家の道義」（「国民」三月二十一日）、「今の文学」（「日本評論」第一号、三月二十八日）、花友情仙「当代の小説」（「出版月評」四月二日）

5　龍渓はさらに、一般記事と連載小説の文章の調子を合わせたこと、主人公を「常情の人」にしたことなどを誇っており、事前に想定していた読者像を事後的に検証して、一般の小説読者と『浮城物語』の読者の区別まで行っている。「郵便報知」を改革した新聞人・龍渓の読者への視線は徹底している。

6　その後、論争を引きずる形で、不知庵は「現代文学」（「国民之友」明治二十四年十一月～二十五年一月）を執筆する。

7　注2①

8　注2②

9　注2⑤

10　注2⑥

11　不知庵の批評は「国民」の目玉の一つであり、創刊号の宣伝にも名前が取り上げられている。

12　不知庵は明治二十二年八月～十月にかけて八回にわたって巌本善治と「小説論略」論争を繰り広げている。最初の不知庵の反論が「東京輿論新誌」、残り七回のやりとりは巌本が主宰する「女学雑誌」。

13　吾佛庵主人「不知庵主人が島田三郎に与ふる書を見てその度量芥子粒より小なるを笑ふ」（「国民」明治二十三年二月六日）

14　民友社および蘇峰については、西田毅ほか編『民友社とその時代』（ミネルヴァ書房、二〇〇三）、有山輝雄『徳富蘇峰と国民新聞』（吉川弘文館、一九九二）を参照した。

15　当時の新聞雑誌については山本武利『新聞と民衆』（紀伊國屋書店、一九七三）を参照した。

16　浅野正道「公共圏と〈国民〉の創生」（「早稲田文学」二〇〇三・九）

17　木村直恵『〈青年〉の誕生』（新曜社、一九九八）による「壮士」「青年」「少年」の分類を参照したが、関心の所在に応じて咀嚼した。木村は政治と文学を「実践」として結合し、文学は常に政治性を持つという立場から政治から逃れて文学へ、という従来の文学史的記述を斥けている。しかし、非政治化してゆく政治性という論旨は、「壮士」から「青年」さらに「少年」へという歴史的な交替図式を想定しており、その想定に従って、近代文学の起源とされる「青年」的なものよりもひとつ前の「壮士」的なものに政治的、文学的な可能性を見ることにつながっている。つまり、結局は文学史的な見取り図を構築しているのである。本稿は、三分類の同時代性を重視しており、文学史に沿った文学の起源を再考するのではなく、文学史的な見取り図自体が成立する根拠を問おうとしている。

18　当時、『浮雲』は文章がくどいなどと否定的に言及されることが多いが、忍月・不知庵は積極的に評価している。

19　龍渓、前掲「浮城物語立案の始末」

20　〈代表〉に焦点を合わせる本稿では詳しく論じないが、龍渓の〈誘惑〉の文学論については、別に論じる予定である。

21　「近代日本文学と「批評」の発見」（「批評空間」第一号、一九九一・四）

22　不知庵「日本小説の三大家」忍月「独逸戯曲の種別」ともに「小文学」第一号から連載。

23　「江戸むらさき」は最終号となった第一二号（明治二十三年十二月二十日）で「作者類聚名彙」として「居士」「亭」「園」など作家のペンネームによる分類を掲載している。もちろん、これら共通の号を持った作者に共通する具体的な意味があるわけではない。

24　「江戸むらさき」も六月の創刊号で、「当世文壇十傑」の投票を呼びかけている。選挙が近づき、投票による代表選出ということ自体が、硯友社的な「評判」の対象になっている。〃硯友社的なもの〃の内部にも、パロディの形で選挙は浸透してゆく。この「十傑」（二十人。得点つき）は反響が大きく、「いらつめ」（第六五号、八月五日）は得点順に並び替え、「日本評論」（第一一号、八月九日）は落選者にエールを送り、「読売」（七月二十四日、二十八日、二十九日）は選に漏れた斉藤緑雨をめぐるやりとりを展開している。

25　女性の排除、年齢だけでなく納税制限された選挙権・被選挙権（直接国税十五円）。選挙人口は当時の総人口の約一％とされている。さらに、声の制限については、議会開会前の教育勅語や、廃止した保安条例の議会中の実施など。当時の選挙と議会については春日国男『日本国会事始』（日本評論者、一九八七）を参照した。

26　投票結果で掲げられる作家は投書より十四人も増えているにも関わらず、春の家の「梅」、南翠の「桃」など、九人が同じ花でイメージされている。枠としての性質を推し量ることができる。

27　ここでの抵抗とは、声を挙げることによって主体的な意思であるかのような幻想のもとに従属してしまうという事態に対する抵

抗である。〈代表〉される側の一見主体的な行為は、〈可視化と代表〉システムの一部である。また、この〈可視化と代表〉システムに対する不知庵・忍月の抵抗と、大衆の抵抗の意味は、当然異なる。抵抗としての沈黙とは、不知庵・忍月が作り出したシステムの付随的な効果であり、〈代表〉される側は、一方的に沈黙させられているからである。

28　ミシェル・フーコー「全体的なものと個的なもの―政治理性批判に向けて」（『フーコー・コレクション6　生政治・統治』ちくま学芸文庫、二〇〇六）を参照。「鎖につながれ殴打されている人間は、誰かが彼のうえに行使している力に服従している。しかし、彼は、権力に服従しているわけではない。ところが、ある人間の最後の救いがことばを拒否して死を選ぶことでさえありうるときに、もし、この人間についに口を開かせることに成功したとするのなら、それこそまさに、その人間になんらかの行動を強いたということになるであろう。つまり、自由が権力に従属させられたということになるのである」

29　小森陽一は「近代批評の出発」（「批評空間」第一号、一九九一・四）で、逍遥の『小説神髄』は「批評」の原理であり「小説」に対してメタレベルに立ちうる「批評」の言葉を生み出す、媒体＝メディア」として機能したと指摘している。

30　①「叢譚を掲げたる理由」一月一日、②「明治廿二年文学上の出来事表」同十三日、③「明治廿二年文学界（重に小説界）の風潮」同十四日、十五日、④「明治廿二年の著作家」同十五日、⑤「新聞紙の小説」同十七日、十八日

31　⑥「文学界の反動」七月三十一日、八月一日、二日、⑦「今年初半文学界（小説界）の風潮」同四日、五日

32　注30⑤

33　逍遥の読者論と龍渓については、斉藤希史「『浮城物語』の近代」（「人文学報」一九九五、『漢文脈の近代』名古屋大学出版会、二〇〇五所収）を参照した。

34　注31⑦。「極衰」と見られる原因として、逍遥は「竹のや主人南翠外史並びに美妙斎主人」「二葉亭」「嵯峨の屋」「春のや」の計六人がほとんど書かなくなったことを挙げるが、それは政治とは無関係であり、それ以外の作家は旺盛に書いていることを主張している。

35　注31⑥「文学界の反動　其二」

36　注31⑥「文学界の反動　其一」

37　「山田美妙大人の小説」（「女学雑誌」第一三二号、明治二十一年十月二十日）

38　野村喬『内田魯庵伝』（リブロポート、一九九四）

39　よく知られている山路愛山「明治文学史」（「国民」明治二十六年三月一日～七日）や北村透谷「日本文学史骨」（「評論」同年四月八日～五月二十日）よりも早い。なお、論争があった明治二十三年は、三上参次・高津鍬三郎『日本文学史』が刊行されて話題になっているほか、関根正直『小説史稿』に対する不知庵の批評が存在する（「小説史稿を読む」（「出版月評」五月三十日）。当時は文学史の季節でもあったわけだが、そのなかでも不知庵の文学史への関心は高い。

40「現代文学　其四」（「国民之友」第一四一号、明治二十五年一月三日）

（はなわ　ひろし・北海道大学大学院修士課程）